

この出入口のこと知ってる？

阪神高速の出入口再発見！

あしや「芦屋」

3号神戸線「芦屋出入口」

芦屋市立美術館博物館の前庭には、岩ヶ平刻印群や呉川遺跡から出土した刻印石などが、美術作品の一部として数点展示されている。右の写真もその作品のひとつ。下段の4石の現代石の上に、刻印石が組み合わされている。刻印石の右側には松江藩堀尾家の刻印〇の左右にメガネのような小さい丸が彫られているのが肉眼で見るとよくわかる。



芦屋市内のあちこちに残る、六甲山で採石され、徳川大坂城の石垣になりそこねた「残念石」。

芦屋市内を歩いていると、公園や街角などに大きな花崗岩の石が見られます。これは徳川大坂城の石垣を築くために六甲山の東南部で採石された石で、大坂城に運ばれずに残ったことから「残念石」と呼ばれています。残念石や採石場について、芦屋市企画部国際文化推進課・学芸員の森山由香里さんに聞きました。

大坂城の石垣の半分は六甲山の石

大坂城というと豊臣秀吉が築いた城というイメージが強いかもしれませんが、今私たちが目にする大坂城の石垣は、大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡した後、徳川の時代になってつくられたものです。元和6年(1620)から寛永6年(1629)にかけて、江戸幕府は徳川の時代を誇示するため、天下普請として西国35ヶ国64家の外様大名たちに豊臣の石垣を埋めて、新しい石垣をつくらせたのです。

長大な石垣をつくるには、多くの石が必要で、瀬戸内海の島々や沿岸などを中心に採石され、約100万個の石が使用されたと推測されています。そのうちの半分以上の石が、芦屋市を含む神戸市東灘区東端から西宮市西部までの六甲山地南麓の山中・山麓部から採石されました。この採石場を「徳川大坂城東六甲採石場」と呼んでいます。徳川大坂城東六甲採石場は6つのエリアに分かれていて、芦屋市域には「城山刻印群」「奥山刻印群」「岩ヶ平刻印群」の3つのエリアがあります。

エッセイ 夏の季節の言葉

夏は暑いものとはいえ、ここ数年の酷暑は度を越して、日が高い時間に外で過ごすのは厳しと感じることが多くなりました。四方から押しつぶしてくるような熱気に頭もぼーっとしてきます。それでも私たちは冷房の効いた部屋に逃げ込めるから良いのです。その身一つで野外で暮らす生き物たちは、この暑さの中でどうしているのでしょうか？

マルハナバチは遊ぶような振る舞いを見せることもあり、知能が高い、と評する人もいる昆虫です。花粉を運び植物が実をつけるのを助けることで、生態系だけでなく農業の支えもしてくれています。彼女たちは(働きバチは皆メスです)

あの素晴らしい夏をもう一度

小さな体にも関わらず、花の咲く場所を学習し、しばらくのあいだ覚えていられます。そうしてエサをたつぷり集めるのです。そんなマルハナバチ、温度が上がると物覚えが悪くなります。気温32℃程度でそうなることで、最近の酷暑を思えばたいしたことない、とボンヤリした頭でうっかり考えてしまっているのですが、そのくらいの温度でも、広い世界で花を上手に見つけなければ生きていけないハチには大ごとです。同じような頭の働きの低下はサングラスに棲む魚でも見られるそうで、暑さにやられるのはみな同じと思えばホッとするのかゾッとするのか。

暑過ぎず寒過ぎず。そんな快適な温度を外れ

た環境がストレスになるのもみな同じです。貝やゴカイといった海の無せきつい動物は、海洋熱波が北太平洋を襲い水温が異常に高くなった年には、普通の時と比べて数十から数百分の一の数の卵しか産まなかったそうです。また乳牛は気温が25度を超えると食欲が落ち、30度ともなると食べる量がグッと減るそうで、牛乳の生産量も悪くなるとか。

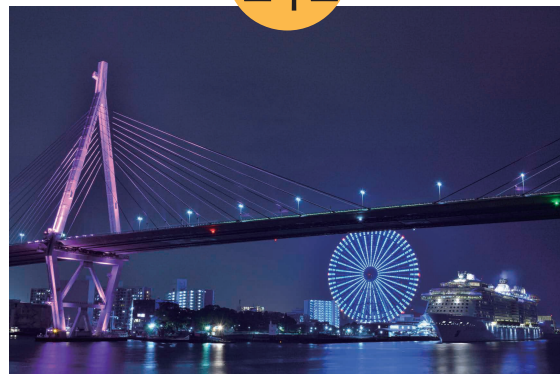
生き物にとっても暑すぎる夏は困りもの。過去の地球にはもっと温度の高い時期があったとはいえ、地球温暖化に伴う最近の気温・水温の高まりは速すぎて、ついていけずにこの世界から姿を消す生き物が出かねません。いくら昼間が暑くとも夕暮れには涼しさを感じた昭和の夏を、ただ懐かしむだけでは済まない時代です。

中田兼介 なかたけんすけ(京都女子大学教授)

1967年大阪生まれ。博士(理学)。専門は動物行動学・生態学。現在日本動物行動学会会長かつ日本蜘蛛学会会長。著書に「もえる!いきもののりくつ」(ミシマ社)「小説みたいに楽しく読める生態学講義」(羊土社)など

関西とともにー【阪神ハイウェイ】
HANSHIN
HIGHWAY

2026 SUMMER
vol.
242



～阪神高速のある風景～
第5回 阪神高速フォトコンテスト優秀写真

CONTENTS

エッセイ●季節の言葉

あの素晴らしい夏をもう一度 中田兼介

この出入口のこと知ってる？●阪神高速の出入口再発見！

あしや「芦屋」

3号神戸線「芦屋出入口」

芦屋市内のあちこちに残る、六甲山で採石され、徳川大坂城の石垣になりそこねた「残念石」

関西の名工

池田匡志さん(奈良団扇職人)

繊細な透かし彫り。よくしなる扇面。美しさと実用性を兼ね備えた奈良団扇

教えてセンセイ

吉田昌樹さん(武庫川女子大学教授)

藻類は持続可能な未来をつくる無限の可能性を秘めた生き物なのです

阪神高速の取り組み

8 阪神高速は「ETC専用料金所」を拡大しています

ちょっと行ってみたい関西うまいもん

10 アスパラガス ●滋賀県彦根市

Hanshin Highway TIMES

ETCスマート割(ETCで、もっとスマートに、もっとお得に)



表紙イラスト「芦屋市民センター玄関前の残念石」
ヤマサキタツヤ:大阪生まれ大阪育ちのイラストレーター。誌面やWebなど各媒体で活動。
「来た見た食うた 大台南見聞録」(書肆侃侃房)など主に台湾に関する書籍を出版。

山で採石した石は、谷沿いに海辺まで曳きおろし、海辺からは船で大坂城まで運びました。その過程で、採石場で採石しかけたまま放置されたり、山から曳きおろす途中で置いていかれたり、海辺の集積場から運ばれずに残った石が「残念石」です。

ではなぜ、今、市内各地で見られる石が残念石だと判断できるのでしょうか。それは、残念石には「刻印」あるいは「矢穴」という石を割るための穴があるからです。刻印とは、大名の家や藩を示すマークです。実は、外様大名たちは、石の採石から石を積み上げて石垣に仕上げるまで、石高にに応じてノルマが割り当てられていました。ですから、まず山に入ると「この石は自分の藩のものだ」と所有権を示すために刻印を彫ったと考えられます。

たとえば、奥山刻印群から岩ヶ平刻印群にかけては、長州藩毛利家の刻印が多くみられ、毛利家がこのあたりで採石活動をしたことがわかります。岩ヶ平刻印群北部では、小浜藩京極家や鳥取藩池田家の刻印が多く見られます。石材として割られた石だけでなく、山の中の目立つた巨大な石にも刻印が彫られていることから、藩の採石領域を示す意味もあったのでしょうか。もちろん、さまざまな藩が採石した石が集まる海辺の集積場でも、刻印によってわが藩の石だと示すことができます。

江戸時代の海岸線は、現在の臨港線とほぼ一致します。臨港線周辺の呉川遺跡、

宮川河床遺跡、西蔵遺跡は当時の集積場跡と考えられ、ここでも「刻印石」が多くみつかっています。

残念石の刻印を探してみよう！

大坂城の石垣を築いた石は花崗岩(御影石)で、今も山中の刻印群に入っていると、大きな花崗岩の石がごろごろと転がっています。石材は岩盤から切り出すのではなく、大きな転石を割ることで採石が行われました。転石を割っていくには、最初にノミを使って「矢穴」を彫る必要があります。矢穴が彫られた状態の石を「矢穴石」と呼びます。ミシン目が並ぶように矢穴を彫り、その矢穴に矢を差し込んで鉄製の槌で打ち込むと石に亀裂が入り、矢穴に沿って左右に割れるというしくみです。

そうして石を割り、石垣の角の目立つ位置に積まれる大きな直方体の「隅石」「隅脇石」のほか、角以外に積まれる隅石に比べて小さめの「築石」に成形しました。東六甲から採石された石材の多くは、築石に成形されています。これは瀬戸内海の島々の採石場の多くが港のすぐそばにあって大きな隅石を船に乗せやすかったのに対し、山から海まで3、4kmの距離があるこの地域は、大きな石材を運びにくかったのが理由だと思えます。

採石に携わったのは西国各藩から連れて来られた人たちなのか、地元の人を

雇ったのかはわかりません。ただ、プロの石工ばかりが動員されたのではないことは明らかです。というのは、残念石に残る矢穴の大きさは、それ以前の中世の時代のものよりも大きく、矢穴の数もやたら多いのです。プロの石工ならムダに大きな矢穴を彫ったりしませんし、必要最低限の数しか彫りません。刻印群には、矢穴を彫ったもののうまく割れなかった失敗作もたくさん残っています。

岩ヶ平刻印群では、掘立柱建物跡や鍛冶炉跡も見つかっています。掘立柱建物跡は、石工の休憩所もしくは、泊まり込みで作業するためのキャンプ場と推測されます。鍛冶炉跡では、矢穴を彫るノミや槌など金属の道具の打ち直しをしていたのでしょう。

さて、「城山刻印群」「奥山刻印群」に行



「六麓荘緑地」にある刻印石。長州藩毛利家の「一に〇」「大」などの刻印を見ることができる。



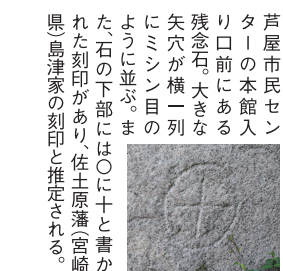
「岩園第二児童遊園」に展示される、矢穴石。大きな矢穴にクサビのような矢を入れ、槌で打って石を割っていった。



大坂城へ向けて船に積み込むための石の集積場だった呉川遺跡から出土した刻印石などが、臨港線沿いの呉川町の歩道の一角に移設展示されている。矢穴に矢を入れ、割った状態の刻印石も見られる。



大坂城へ向けて船に積み込むための石の集積場だった呉川遺跡から出土した刻印石などが、臨港線沿いの呉川町の歩道の一角に移設展示されている。矢穴に矢を入れ、割った状態の刻印石も見られる。



芦屋市民センターの1階にある残念石。大きな矢穴が横一列にミシン目のように並ぶ。また、石の下部には〇に十と書かれた刻印があり、佐土原藩(宮崎県)津家の刻印と推定される。



大坂城へ向けて船に積み込むための石の集積場だった呉川遺跡から出土した刻印石などが、臨港線沿いの呉川町の歩道の一角に移設展示されている。矢穴に矢を入れ、割った状態の刻印石も見られる。

「芦屋市内ではあちこちで残念石が見られるので、ぜひ矢穴や刻印をチェックしてみてください。刻印を見つけたら、どの藩の刻印かなど下記のQRコード「見学できる石材(残念石)」から確認できますよ」と学芸員の森山さん。



★芦屋神社

明治時代の神社合祀令の発布によって、芦屋村に点在していたすべての神社の神々を合祀し、芦屋村総鎮守となった。そのため、二四社の神々を奉斎している。神社の創始は不詳ながら、境内に横穴式石室古墳があることなどから約千四百年前には、山の神を遷葬する施設として建立されたのではないかと考えられる。平安時代の歌人・猿丸大夫の墓所があることや、古来この地を天神山と称することからも特別な聖域であったことがうかがえる。



★滴翠美術館

かつて大阪財界で活躍した、山口吉郎兵衛氏の邸宅の一部を改装し、1964(昭和39)年、美術館として開館。陶器などの古美術品コレクションが展示されている。山口氏は、京焼や紀州焼などの陶器をはじめ、人形、かるた、羽子板などを収集。その数は、約2500点にも及ぶ。また、山口邸は、昭和を代表するモダニズム建築家の安井武雄氏が設計を手掛けた。館内には、滴翠窯陶芸教室があり、陶芸体験もできる。



★芦屋仏教会館

株式会社丸紅商店(現・丸紅株式会社)の初代社長伊藤長兵衛が、私財を投じて1927(昭和2)年に設立。明治・大正時代の洋風建築と東洋風建築の特徴を折衷した様式の芦屋仏教会館は、奈良ホテルや大阪中之島公会堂などの名建築を手がけた片岡安氏の設計。今も仏教講座など、地域社会に根差した活動の拠点となっている。1949～1954(昭和24～29)年の間は、芦屋市の図書館としても利用された。見学は外観のみ。

★芦屋市立美術館

美術部門と歴史部門を併せた複合施設。小出楯重、田中敦子、吉原治良など、芦屋にゆかりのある近現代の美術家のコレクションを多く持ち、さまざまな企画展が開催されている。芦屋の歴史に関する展示もあり、資料の収集や調査も行っている。敷地内には、小出楯重のアトリエが復元され、愛用の画材などが展示されている。また前庭には、市内から出土した刻印石を使用した彫刻作品も設置されている。



(写真提供: 芦屋市立美術館)



★ヨドコウ迎賓館

灘五郷の酒蔵・櫻正宗株式会社(旧社名:山邑酒造株式会社)の8代目当主・山邑太左衛門の別邸として、1924(大正13)年に建てられた。原設計者はフランク・ロイド・ライト。阪神間モダニズムを代表する名建築で、国指定の重要文化財。幾何学的な彫刻をほどこした大谷石、マホガニーの複雑な木組み装飾など、特に2階応接室、4階食堂などにライト建築の特徴がみられる。4階のバルコニーからは、六甲山の山並みから大阪湾まで一望できる。



★谷崎潤一郎記念館

谷崎潤一郎は、昭和9年から足かけ3年の間、芦屋に住み、名作「細雪」でも舞台を芦屋に設定したことから、芦屋市が開設した記念館。和風鉄筋2階建・寄棟造・瓦葺の館内には、松子夫人をはじめ親族らからの寄贈品を中心に、細雪などの自筆原稿・手紙・初版本などの資料を収蔵・展示している。座机や硯などを配した四畳半の書斎コーナーもあり、庭園は谷崎の関西での最後の住居・京都の瀟灑亭(せんかんでい)の庭を模したものだ。



★芦屋マリーナ

「日本が世界に誇れるマリーナ」がコンセプトの芦屋マリーナ。キラキラと輝く青い海にクルーザーやヨットが停泊する、南芦屋浜のランドマーク。芦屋マリーナ周辺には遊歩道が整備され、海を眺めながら散歩するにもぴったり。振り返ると六甲山の山並みも見える。芦屋マリーナ・クラブハウス1階にあるイタリアンレストランは、一般利用もできる。